

阿蘇山の火山活動解説資料（令和8年8月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

阿蘇山では、GNSS 連続観測により、2026 年5月頃から草千里を挟む基線及び広域の基線において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

12日頃から火山性微動の振幅が増大し、14日にはさらに大きな状態となりました。同日実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量の急増を確認しました。火山活動のさらなる高まりが認められたため、14日15時45分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

18日頃から火山性微動の振幅は低下した状態で経過しています。また、17日以降に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量に変化はあるものの急激な増減はみられませんでした。これらのことから、火山活動に低下傾向が認められたため、9月1日16時00分（期間外）に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

一方、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態となるなど、火山活動は引き続き高まった状態であることから、中岳第一火口から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

中岳第一火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスに注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1、図2-②～④、図5）

火山性微動の振幅は、概ね小さな状態で推移しましたが、12日19時頃から振幅が増大し、14日15時過ぎから中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅が概ね6.0 μ m/sと4.0 μ m/sを超えさらに大きな状態となりました。振幅はその後増減を繰り返しながら概ね大きな状態で経過していましたが、18日頃に低下し、以降は概ね小さな状態で経過しています。

火山性地震の月回数は4,002回（7月：4,001回）と、多い状態でした。孤立型微動は4,917回と前月（7月：5,374回）より減少しましたが、やや多い状態でした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

今回の火山活動解説資料（令和8年9月分）は令和8年10月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ 1 km 付近に分布しました。

・火山ガスの状況（図2-⑤）

14日に山麓において実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は2,700トンとそれ以前（7月：700～1,600トン、8月6日：1,200トン）と比べて急増しましたが、その後、17日から9月1日（期間外）までに実施した現地調査では、1,000～2,300トンと変化はあるものの急激な増減はみられませんでした。

・噴煙など表面現象の状況（図2-①⑥⑧、図3、図4）

中岳第一火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上1,100m（7月：900m）まで上がりました。今期間、監視カメラにより南側火口壁の赤熱は認められませんでした。

5日に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約6割と前月（7月：約7割）と比べて減少していました。湯だまり内で噴湯と、高さ数m程度の小規模な土砂噴出を確認しました。赤外熱映像装置による観測では、湯だまり面の最高温度は77℃と前月（7月：73℃）と同程度でした。南側火口壁の最高温度は391℃と前月（7月：347℃）と比べて高くなっていました。地熱域の高温の領域に特段の変化はありませんでした。

・地殻変動の状況（図6、図7）

GNSS 連続観測では、2026年5月頃から草千里を挟む基線及び広域の基線において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

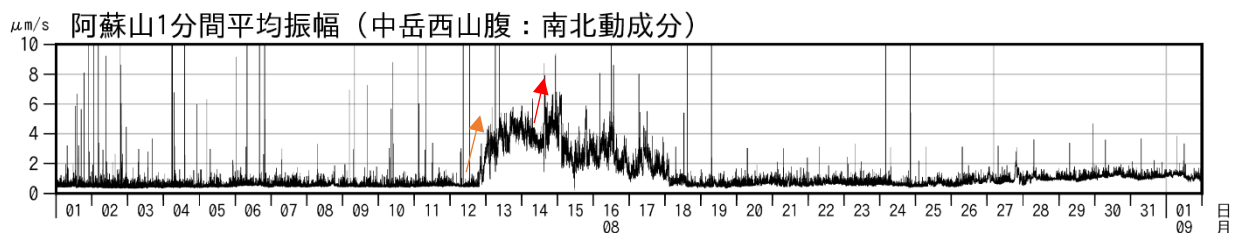


図1 阿蘇山 火山性微動 1 分間平均振幅
（中岳西山腹観測点南北動成分、8月1日～9月1日（期間外））

12日19時頃から火山性微動の振幅が増大し、大きな状態となりました（橙色矢印）。14日15時過ぎには中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅で概ね6.0μm/sと、4.0μm/sを超えさらに大きな状態となりました（赤色矢印）。振幅はその後増減を繰り返しながら概ね大きな状態で経過していましたが、18日頃から低下し、以降は概ね小さな状態で推移しています。

1分間平均振幅で毎日07時20分頃にみられる振幅の高まりは校正信号によるものです。

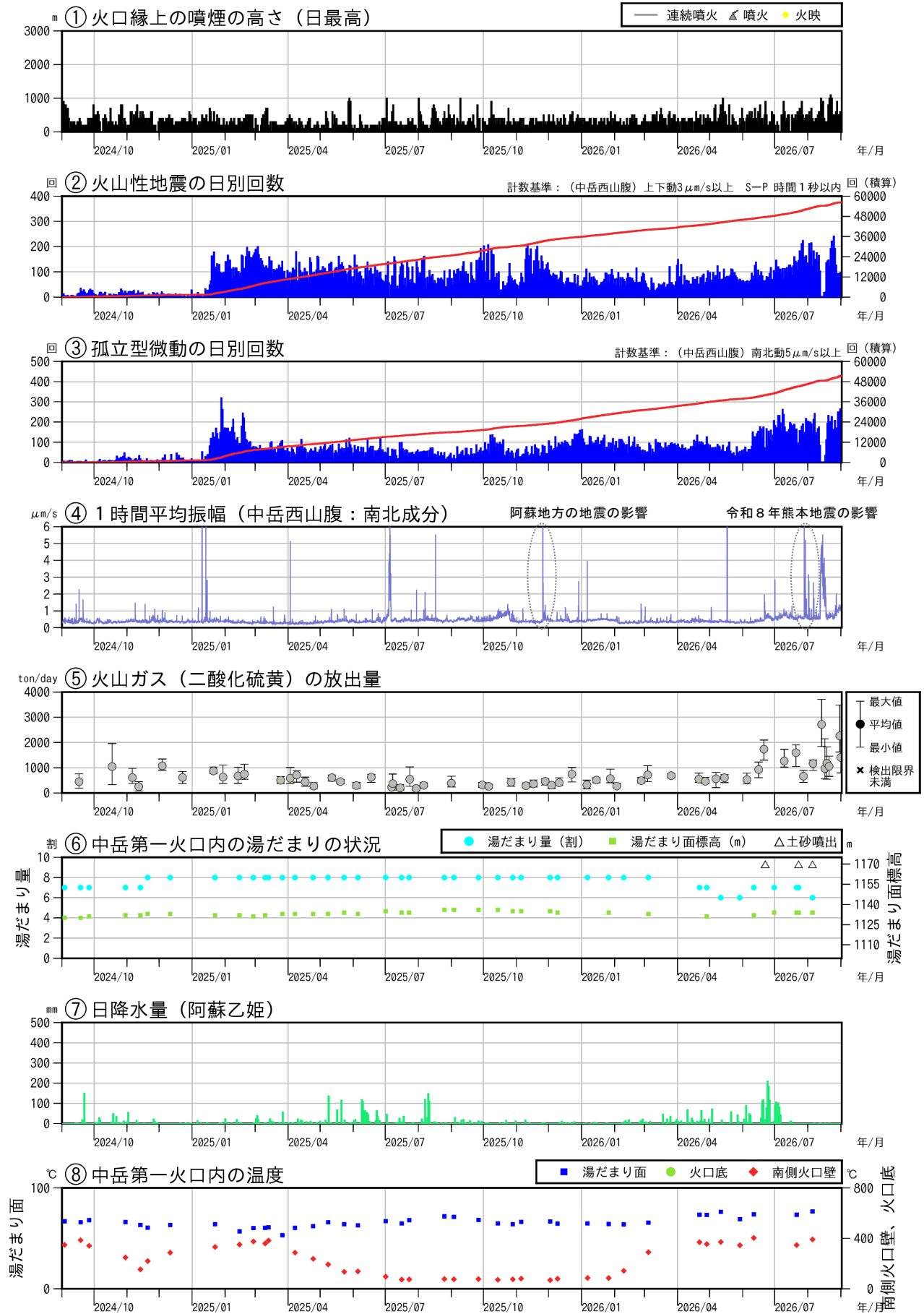


図2（前ページ） 阿蘇山 火山活動経過図（2024年9月～2026年9月1日（期間外））

＜8月の状況：14日に噴火警戒レベルを2から3に引き上げました。9月1日（期間外）に噴火警戒レベルを3から2に引き下げました。＞

- ・中岳第一火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上1,100m（7月：900m）まで上がりました。
- ・火山性地震の月回数は4,002回（7月：4,001回）と多い状態でした。孤立型微動は4,917回と前月（7月：5,374回）と比較して減少しましたが、やや多い状態でした。
- ・12日19時頃から火山性微動の振幅が増大し、大きな状態となりました。14日15時過ぎには中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅で概ね6.0 μ m/sと、4.0 μ m/sを超えさらに大きな状態となりました。振幅はその後増減を繰り返しながら概ね大きな状態で経過しましたが、18日頃に低下し、以降は概ね小さな状態で推移しています。
- ・14日に山麓において実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は2,700トンとそれ以前（7月：700～1,600トン、8月6日：1,200トン）と比べて急増しましたが、17日から9月1日（期間外）までに実施した現地調査では、1,000～2,300トンと変化はあるものの急激な増減はみられませんでした。
- ・5日に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約6割と前月（7月：約7割）と比べて減少していました。湯だまり面の最高温度は77℃と前月（7月：73℃）と同程度でした。
- ・南側火口壁の最高温度は391℃と、前月（7月：347℃）と比べて高くなっていました。

赤線は火山性地震や孤立型微動の回数の積算（右軸）を示します。

火山性微動の振幅が大きく、火山性地震や孤立型微動の計数ができない期間があります。

⑤、⑥及び⑧は現地調査の結果を示しています。

⑥の湯だまり量及び湯だまり面標高は、火口縁からの観測で確認しています。

⑦はアメダス阿蘇乙姫（中岳第一火口から北西約8km）の観測値です。

⑧は赤外熱映像装置で計測しています。火口底温度は湯だまり表面と南側火口壁を除く火口内の温度を示します。



図3 阿蘇山 中岳第一火口の噴煙の状況（8月22日、草千里監視カメラ）

白色の噴煙が最高で火口縁上1,100m（7月：900m）まで上がりました。今期間、南側火口壁の赤熱は認められませんでした。

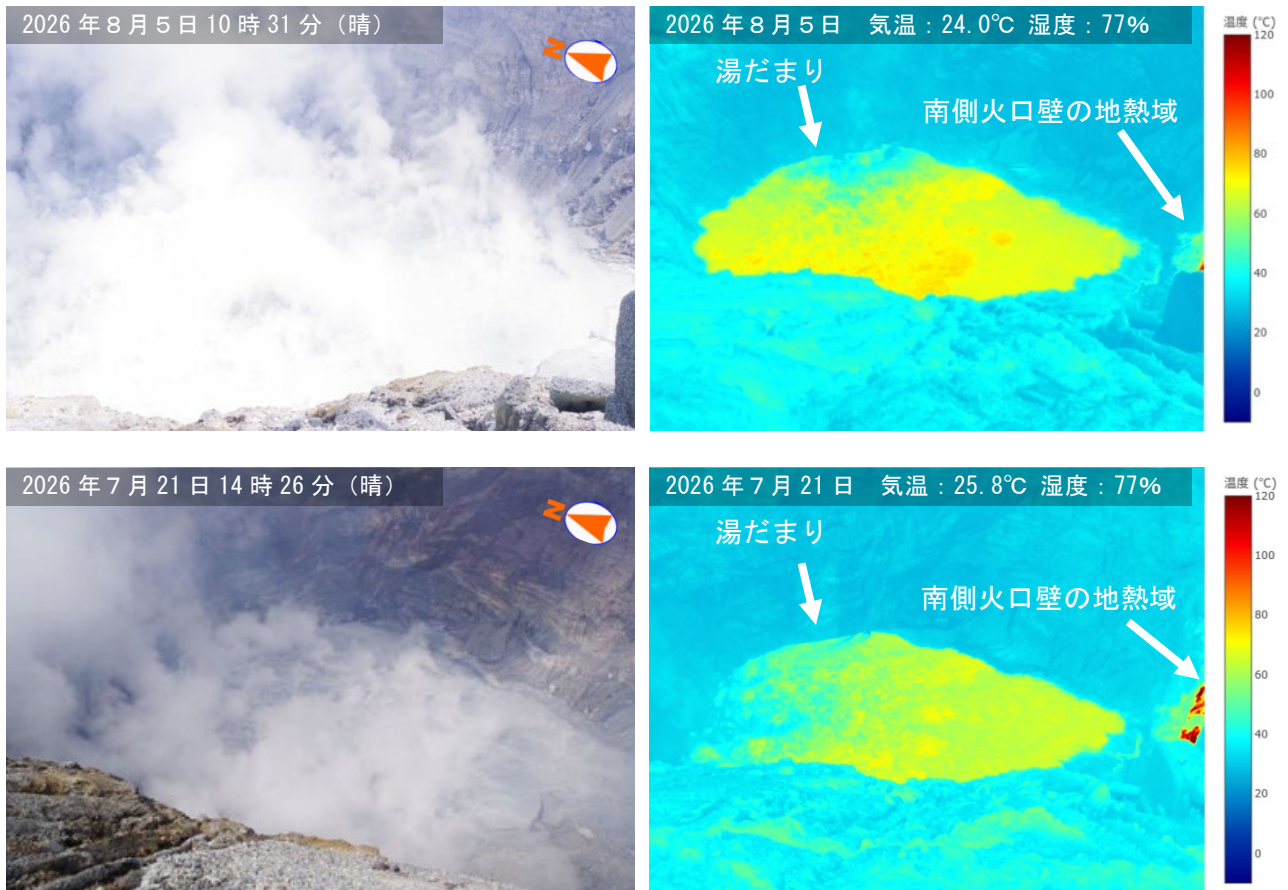


図 4-1 阿蘇山 中岳第一火口底の状況

（火口南西側観測定点から撮影 上図：8月5日、下図：7月21日）

- ・ 5日に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約6割と前月（7月：約7割）と比べて減少していました。
- ・ 湯だまり内で噴湯と、高さ数m程度の小規模な土砂噴出を確認しました。
- ・ 赤外熱映像装置による観測では、湯だまり面の最高温度は77°Cと前月（7月：73°C）と同程度でした。

※赤外熱映像装置で撮影した画像は、8月5日は10時35分～40分、7月21日は14時14分～19分の複数の画像を合成し噴煙の影響を軽減しました。

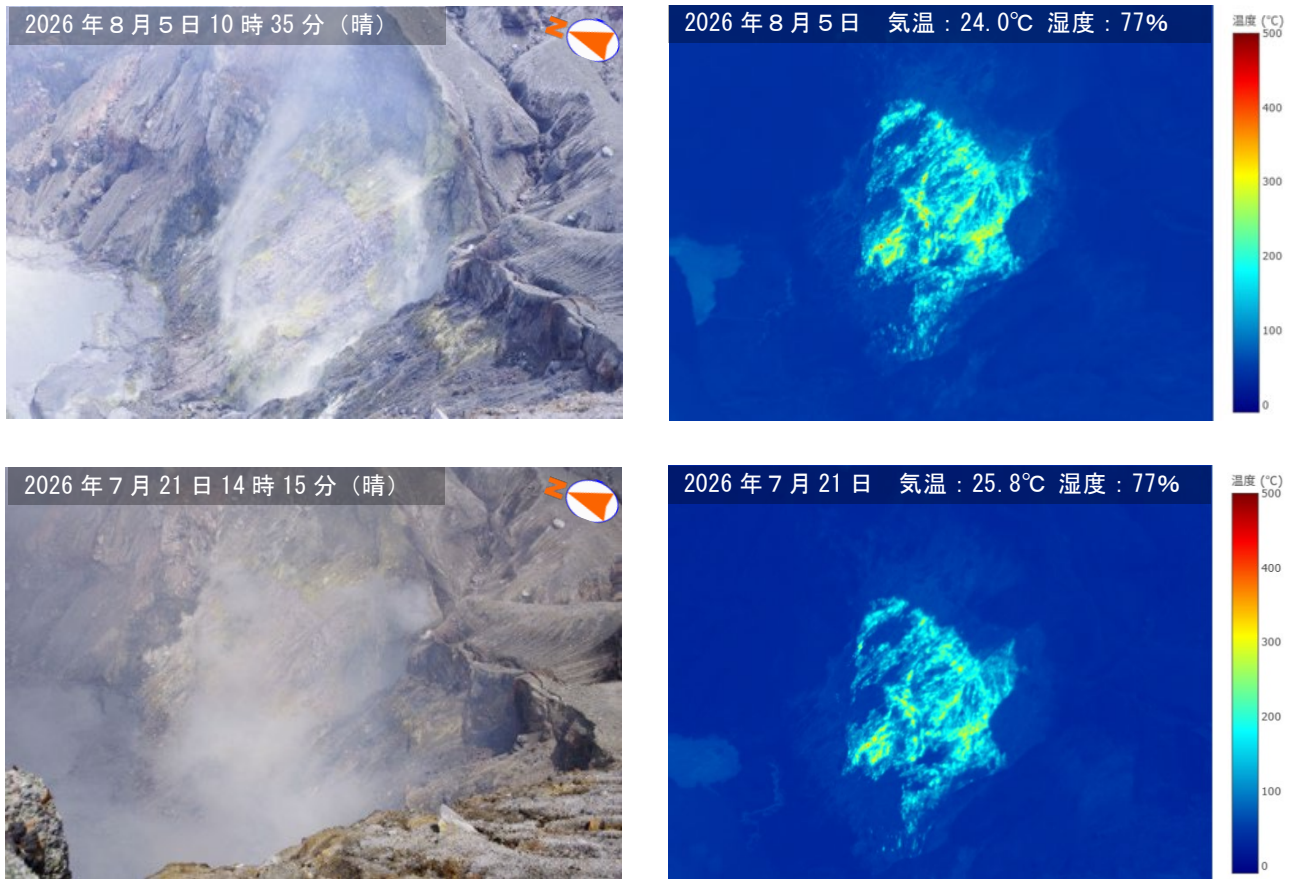


図4-2 阿蘇山 中岳第一火口 南側火口壁の状況
（火口南西側観測定点から撮影 上図：8月5日、下図：7月21日）

5日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測で、南側火口壁の最高温度は391℃と前月（7月：347℃）と比べて高くなっていました。高温の領域の状況に大きな変化は認められませんでした。

※赤外熱映像装置で撮影した画像は、8月5日は10時26分～31分、7月21日は14時24分～29分の複数の画像を合成し噴煙の影響を軽減しました。

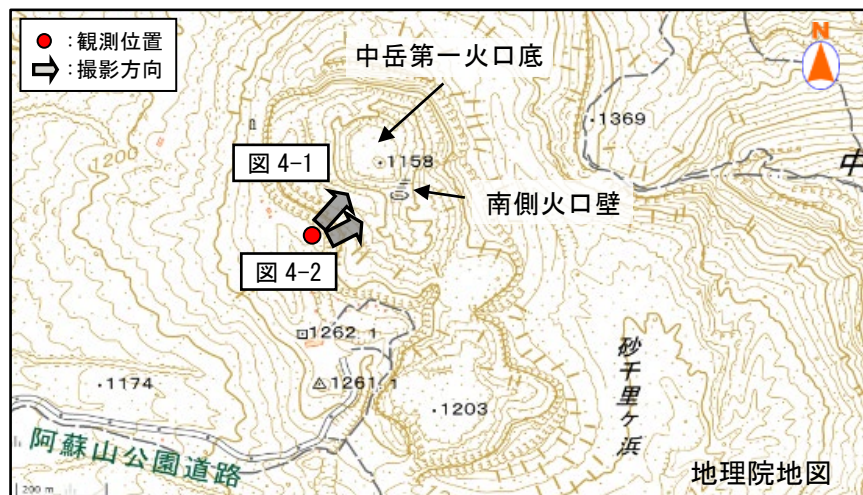


図4-3 阿蘇山 現地調査観測位置図（観測位置及び撮影方向）

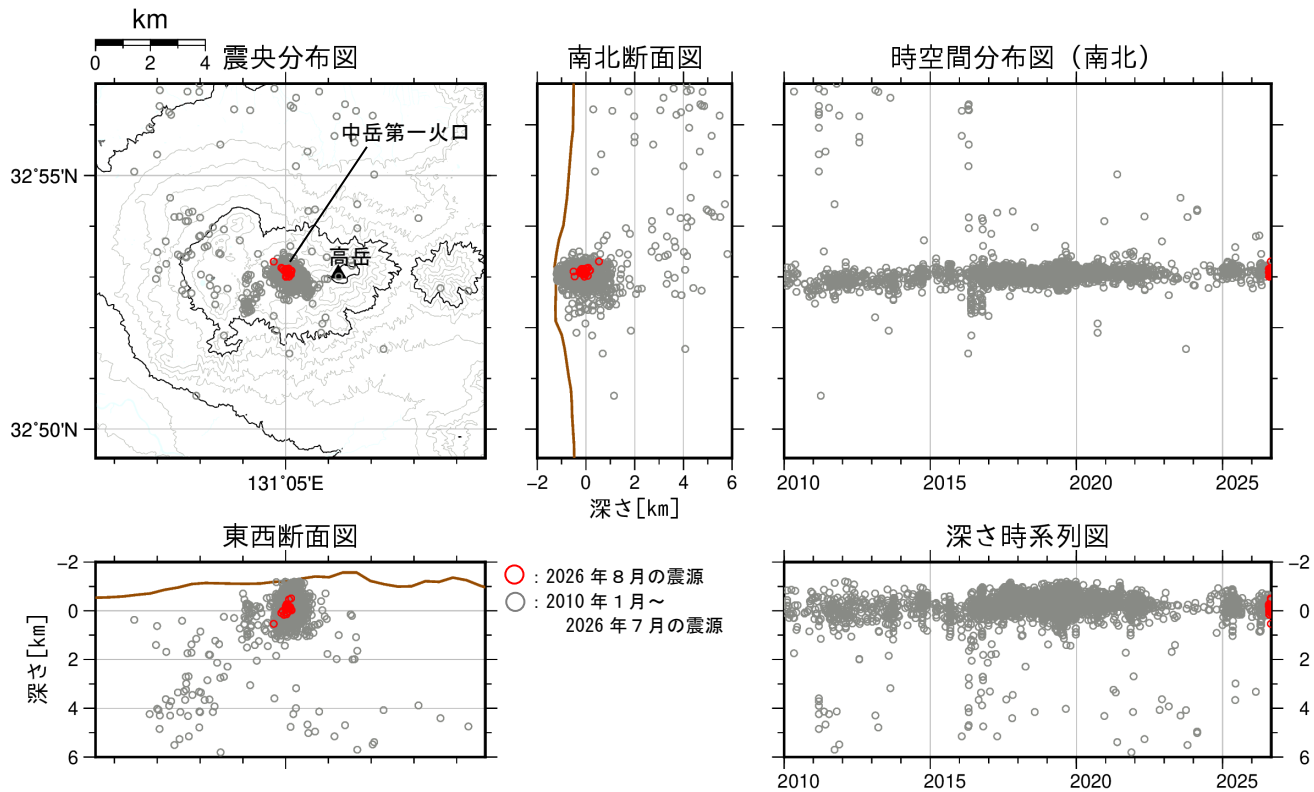
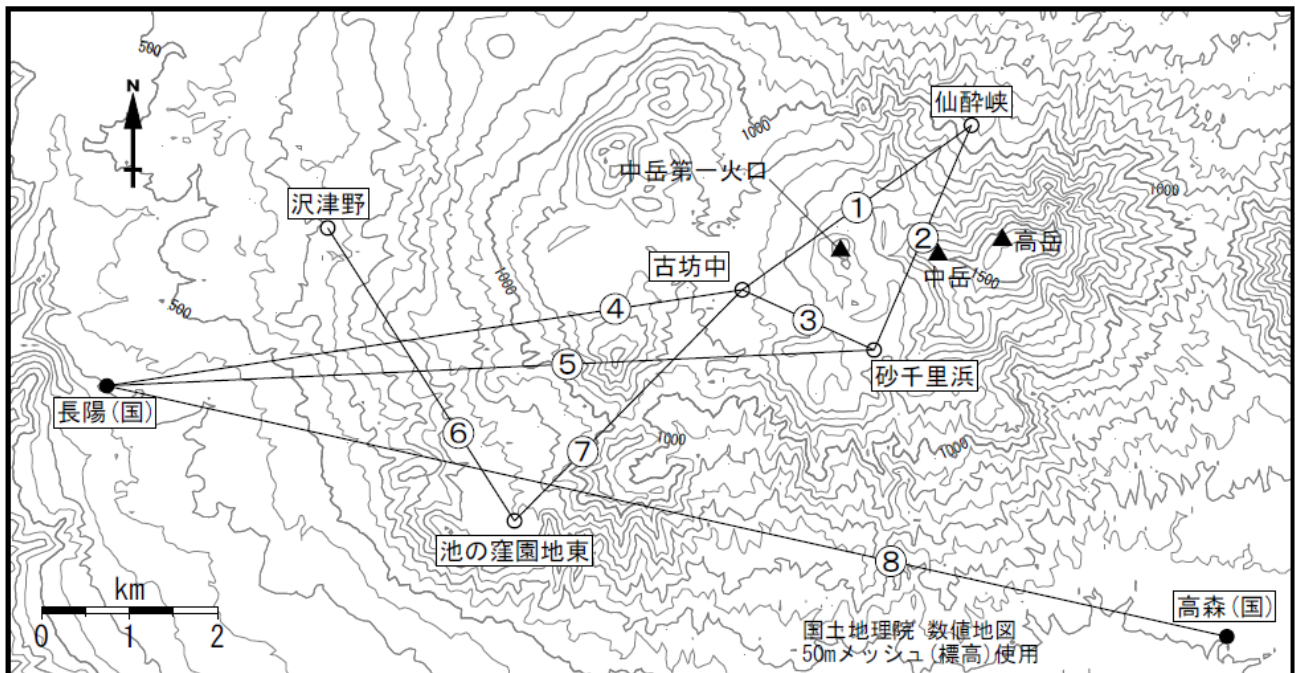


図5 阿蘇山 火山性地震の震源分布

< 8月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ1 km 付近に分布しました。



小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院

図6 阿蘇山 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院

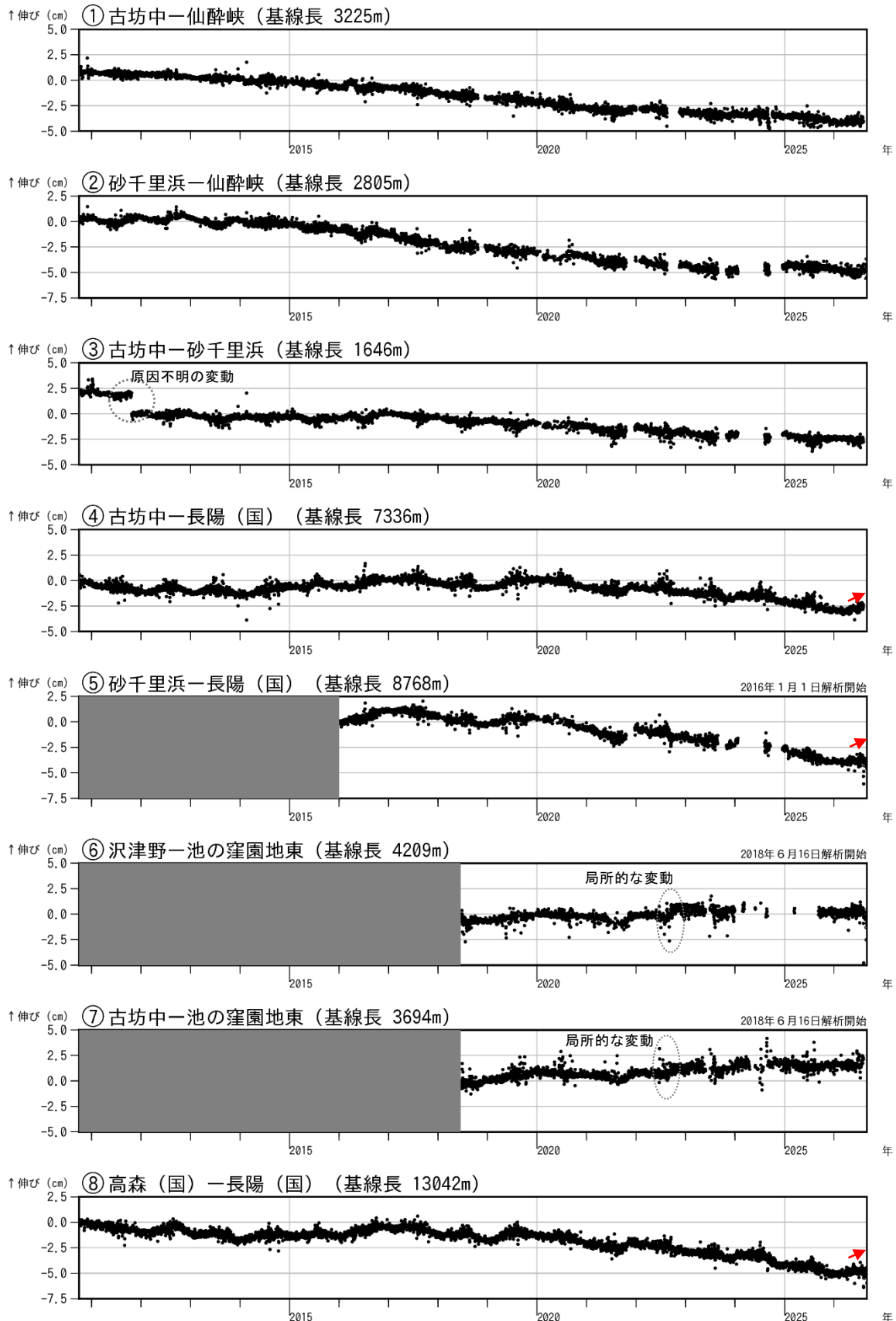


図7 阿蘇山 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010年10月～2026年8月)

GNSS 連続観測では、2026年5月頃から草千里を挟む基線（④、⑤）及び広域の基線（⑧）において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

これらの基線は図6の①～⑧に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年（2016年）熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

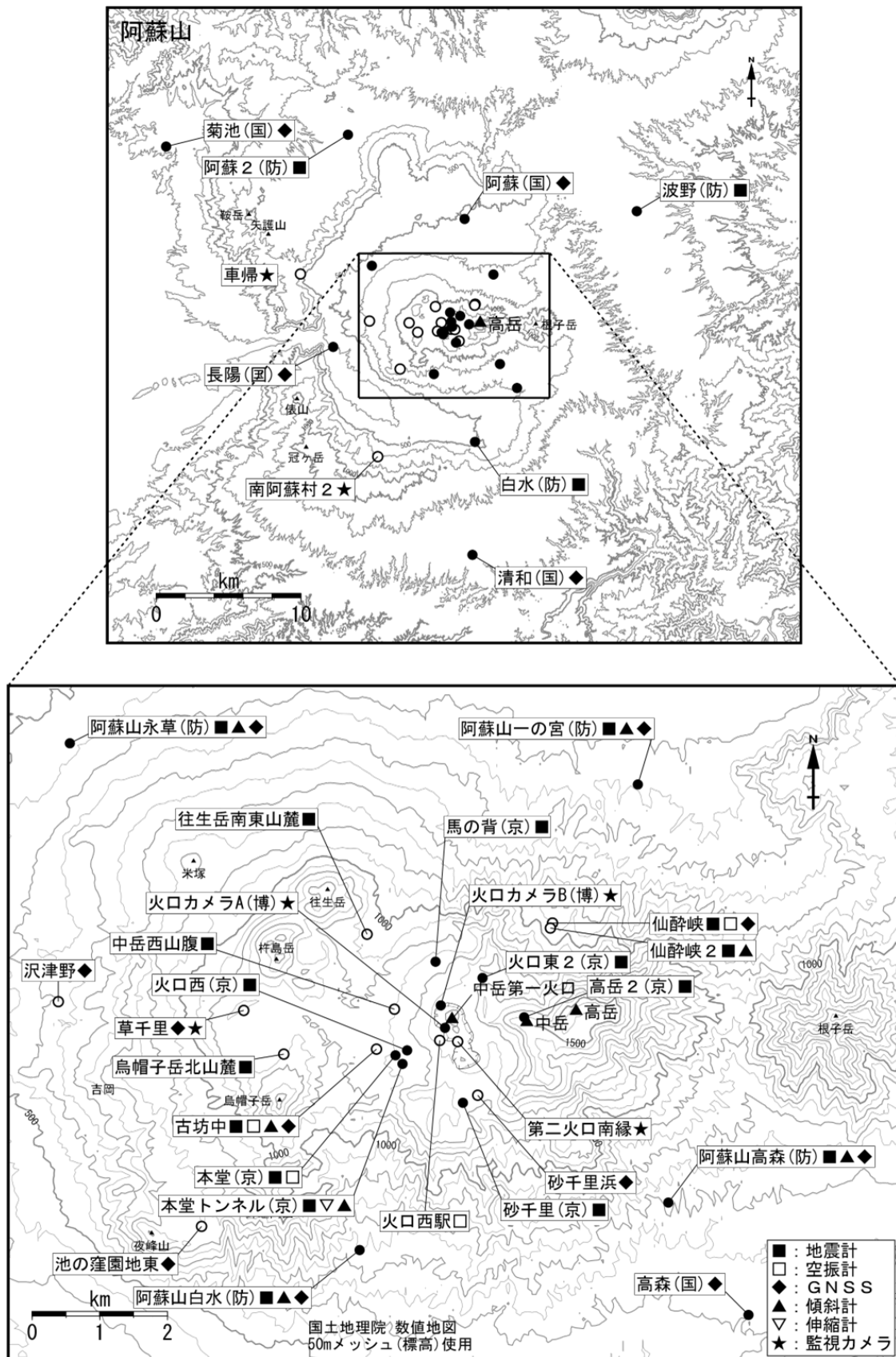


図8 阿蘇山 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（京）：京都大学、（防）：防災科学技術研究所、（博）：阿蘇火山博物館、（国）：国土地理院